

ライフ展ファミリートーク 渡邊仁子さんインタビュー

2020年5月31日（日）、公開制作中の渡邊義紘さんのお母さんの仁子さんにインタビューを行いました。



－2020年1月末に義紘さんが交通事故で両足を骨折され、大変だったと伺いました。

私も付き添いで病院に泊まり込み、くたびれましたが、逆に良かった面もあります。普段は、外に出かけることが好きなので、ずっと家でジッとしているのもストレスなんですよ。最初の一か月は両足が腫れて起き上がるのも大変でした。「家に帰ったらやります」と言っても、病院内ではほとんど制作しませんでしたね。

－退院してからは、どんな作品を作り始められましたか？

帰ってきたら、切り始めましたよ。キリンを切ったのですが、結構出来が良かった。それはなぜかと言うと、久しぶりに図鑑をじっくり見てから切ったからなのです。最近は、切る細かさとか、技術は上がってきているのですが、形がパターン化している所がありました。切るのに慣れてしまっているのですね。

記憶力はいい方だと思うのですが、やはり、私たちと同じように、義紘も年を取っていき、脳は老化していくんですね。小さい時は、色んな生き物、動物を見るたびに新鮮であったものが、ゲームやアニメなど、また別の興味のあるもの、刺激あるものも多くなり、これまで蓄えられていた記憶も少し劣化しているのではないか！？と思えるのです。それで、図鑑を見たり、実物を改めて観察すると、表現内容がアップデートされていくようです。

ー自己模倣との闘いは、いつの時代もアーティストが直面する課題ですね。

ただ、やはりやりだすと真剣で、集中力はすごいですよ。これが「自分の仕事だ」と思っているみたい。例えば、作品の注文があると、×切に合わせて仕上げてきます。公開制作中も、小さい女の子が来たので「何が好き？」と聞いたらゾウだと言うので、小さいのを切ってあげました。ただ、作り出すと本気で細かいところまで切り出しちゃうので、「まあそのへんで」と言って止めるんですが、そのあたりの加減が昔に比べて随分できるようになりましたね。皆が喜んでくれたり、驚いてくれたりするの、やはり自分の存在理由にもなって、自信になるようですね。

ー「仕事」や「自分の存在理由がある」というのは、とても素敵なことですね。来場者には、折り葉も人気ようです。

実はあれは、すごく「旬」がある作品なんです。冬の1か月くらいしか作れない、期間限定の作品です。使うのもクヌギだけ。シャキッとした細長いかたちと、コシのある固さと厚みがちょうどいいんでしょうね。でも最近、温暖化の影響でクヌギの葉っぱが昔みたいに綺麗に落葉しないんですよ。12月頃まであたたかかったりするでしょう？落ちた葉っぱに斑点があったりするの。周りのイガイガの長さも昔に比べて長いし。意外なほど、自然に左右される作品なんです。

ー来場者からは、作品のレイアウトや額装がおしゃれという声も聞かれました。

そうっていただいて嬉しいです。義紘は作品を額装したりする所までは考えて作らないから、そこから先は私の仕事です。私も凝り性なところがあって、モノを作ったりするのも好きだから、どうしたらカッコよく見えるかいつも考えるんです。作品の背景に和紙を上手に使いたいと思って、ちぎり絵教室に行ったら、ハマっちゃって講師の資格までとっちゃった(笑)。フレームにずれないようにおさめるのも、静電気との闘いで一苦労なんですよ。額屋さんにコツを聞いて、色々な展示を見て、カッコよく見せる方法や、いいアイデアないかな？と日夜、研究しています。それで作品がパッと良く見えると、やっぱり私も嬉しいし、その時間がすごくクリエイティブで楽しいんですよ。

一私も展示の際に、ホームセンターをウロウロして、安くて見栄えのするパーツを探して、その気持ちを味わいました（笑）。作品の見せ方を最後まで作家がコントロールするのではなく、周りの人に開かれ、委ねられている。気づくと自分のクリエイティビティが引き出されている気がします。これから、どんな作品をつくっていく予定ですか？

切り絵は、リアルとデフォルメのさじ加減が難しいんです。あんまりリアルにやりすぎちゃうと怖かったり、ネコとかヒョウとか区別がつきにくくなっちゃう。デザイン性も必要なんですよね。ただ、もう少し大人っぽい表現というか、ワンパターンではない進化の方向を模索中ですね。それから、いつか写真集を作りたいなと思っています。そのためには、お金もいるし、出版の勉強もしなきゃいけない。私も最初から何でも出来たのでは全くなくて、その場その場で、どうやったら出来るんだろう？と悩みながら一步一步やってきました。まだ、あれもこれもと、色々やっておきたいことがあるので、しんどいけど、まだまだボケる訳にも倒れる訳にもいきません（笑）。